



巻頭言

学びの自己決定を 子どもに委ねる

学びの内容を子どもたち自身に委ね、
一人ひとりの興味・関心を最大限引き出す自己決定的学習。
教師の丁寧な教材研究と支援が不可欠です。



上智大学教授
(文部科学省教育課程部会委員)
奈須 正裕

自己決定的学習

一人ひとりの子どもの興味・関心を最大限許容し、
また発揮できる授業にしたい。それは教師なら誰しも
が願うことであり、個別最適な学びの観点からも大切な
ことです。

当然ながらそこでは、子どもたちの自由な意思決定
が尊重される必要があります。人は誰しも自由を切実に
求めています。ところが、従来の学校は何から何ま
であらかじめ決められていて、ほとんど自由がありま
せませんでした。だからこそ、自分で決めて進められる自
己決定的学習を子どもは大いに歓迎しますし、一所
懸命に取り組むのです。

順序選択学習

自己決定的学習の中でも、もっともシンプルなのは
順序選択学習です。教科学習ではよく系統性がいわ
れますが、実際には単元内のいくつかの学習内容や
学習課題の順序を入れ替えても問題なく学べる場合
が少なくありません。教科書に示された順序も、多く
は合理的な学習順序の一例示と解釈すればよく、そ
の証拠に、他社の教科書では別の順序になっている
こともあります。ならば、子どもが学習順序を選べる
ようにしてはどうでしょうか。

従来の学習

学ぶ内容があらかじめ決められていて
全員が同じ課題、同じタイミングで学ぶ



自己決定的学習

個別最適な学びの観点からも大切!

子どもたち一人ひとりの興味・関心や学習スタイル
が最大限許容され、発揮できる



たとえば、1年生算数の図形学習では、点を線で結ぶ、棒を操作する、色板を組み合わせたという三つの異なる方法で「図形の構成」について学びますが、三つをどの順序で行っても特に問題はありません。そこで、三つの活動を各自で自由に展開できるコーナーを、教室や隣接するオープンスペース、空き教室などに設置し、活動の順序やそれぞれにかかる時間を各自に委ねてみると、ダイナミックで柔軟性のある順序選択学習にできます。

自己選択の機会を増やす

順序選択学習では、選択といっても、結局は指定されたすべての課題や活動の遂行が要求されます。食事のメニューはすべて決まっています、何からどのような順序で食べるかだけ自分で決めてよいという程度の自由度にすぎません。にもかかわらず、子どもは「どれからやろうかな」などと目を輝かせているから不思議です。

この事実は、従来の学習がいかにがんじがらめ

だったかをよく表しています。どんな順序で食べるかさえ、いちいち指示されていたのです。「今日は色板を使っていろんな形をつくってみましょう。最初につくるのは、おうちの形です。5分でやってみましょう」といった具合です。それが終わればロケット、お花と続きますが、本当は何からつくっても、何分かけても、まったく問題はないはずです。

このように考えると、なぜこれまですべてを教師が決めて、教師の指示の下で進めてきたのか、不思議なくらいです。主体性や個性、自ら学び進める力を育むには、自己選択の機会を増やすことが有効です。

課題選択学習

順序選択学習とは別に、学習課題を自由に選択できる課題選択学習という学習方法もあります。単元や小単元の目標を達成するための学習課題が複数考案できる場合に、実施可能となります。子どもは自らの興味・関心に応じてそのうちの一つを選択し、その課題のみを追究します。

資料1 1年生算数「図形の構成」の順序選択学習の様子



▲点を線で結ぶ



▲棒を操作する



▲色板を組み合わせる

自分で選択できる余地があることで、いきいきと学んでいますね。



課題選択学習は、これまでも生活科などでは盛んに実践されてきました。育てる野菜、つくるおもちゃ、探検するお店、表現や発表の方法など、生活科では課題選択になっていない授業を探す方が難しいくらいです。しかし、それですべての子どもにしっかりとした学びが保障できているかという点、心許ない部分もあります。

2年生の動くおもちゃづくりで考えると、代表的な動力であるゴムの力と風の力では、ゴムの方が工夫の余地が大きくなっています。動力の様子とおもちゃの動きを原因と結果で把握したり、さまざまに試して結果から予想の適否を確認したりするにも、ゴムの方が有利です。

子どもたちはおもちゃの動きに興味津々で、「こんな動きをさせたい」と願ってさまざまに改良を進めます。そう考えると、選択した課題によってその願いの実現、さらにそれと相即的に結びついている学びの深まりに大きな違いがあるのは、少々問題です。もちろん、だからといってゴムのおもちゃに統一するといったやり方も、生活科のねらいからして本末転倒なのは明らかでしょう。

大切なのは、子どもに選択を委ねる際、各選択肢がもたらす学びの深まりや活動展開の広がりについて、教師はしっかりと教材研究をし、何が起こりそうかを的確に、また幅広に把握する必要があるということです。とりわけ、学びの深まりに困難が予想される風の力について、それを克服し、豊かな学びを実現するための多様な支援策や学習環境整備に注力することが望まれます。

選択課題ごとに指導案を書き分ける

さらにいえば、選択肢ごとに指導案を書くべきです。せめて「予想される子どもの活動」と「教師の支援」だけでもしっかり書き分けておくと、授業は格段によくなります。ゴムと風では、子どもが出合う問題やそれをどうやって乗り越えていくかにさまざまな違いがあります。生活科の指導案でよく目にする「それぞれの活動を臨機応変に支援する」「一人ひとりのよさを認めて励ます」といった大雑把な計画や準備では、多様な姿を示す子どもたちに対し、意味のある支援をタイミングよく実施できる可能性は決して高くはありません。よく「生活科は活動の

自由度が高いから何が起るかわからない」という声がありますが、だからといって「出たとこ勝負」では、教師として怠慢のそしりを受けることは避けられません。「何が起るかわからない」からこそ、何が起っても適切な対応が取れるよう、教材研究を深め、子どもの見取りに専心すべきなのです。仕込みの段階で手抜きをせず、丁寧な仕事をすればするほど仕上がりがよくなるのは、料理も授業も同じです。

生活科では、新聞にまとめる、紙芝居をつくって演じる、ポスターで訴えるといった具合に、表現活動の選択が子どもに委ねられることも多いのですが、何をどう表現するのか、誰にどのようなメッセージを伝えるのかによって、適切な方法は変わってきます。その点を教師が丁寧に見取り、また各表現方法の特質をふまえることで、表現方法を選択する段階でも、選択した方法で表現を工夫する段階でも、より適切な支援が可能となってきます。

課題選択学習という視点から従来の取り組みを見直し、改善を図ることで、子どもの興味・関心に応じつつ質の高い学びの実現が見込める生活科授業にすることができるのです。

予想される子どもの活動と
教師の支援を書き分けて
指導案を作成する



自由研究学習

順序選択学習や課題選択学習のほか、自由研究学習もあります。興味・関心やキャリアの方向性に基づき、自由に学習内容を設定して探究する学習方法です。斬新に思えるかもしれませんが、夏休みの自由研究を教師の支援の下で充実させると考えれば、納得いただけるでしょう。学習指導要領上は、個人により探究課題が異なる総合的な学習として実践が可能です。

各自の判断で何をどう学んでもよいのですが、だからこそ課題設定では表層的な興味に流されぬよう、自身にとってそれを学ぶ意味を明らかにするよう求めたり、探究が場当たりので散漫なものとならない

よう、学習計画の立案と自己評価の機会をしっかりと設け、教師が必要な指導や支援を行ったりすることが重視されてきました。

興味深いのは、相当数の子どもが教科の発展学習に取り組むことでしょう。資料2は、室町時代の学習をきっかけに、お茶のお点前を体験的に学んでいる様子です。子どもにとって、教科はつまらないものではありません。ただ、どこにおもしろさを感じ、何をさらに学びたいかには大なる多様性があります。自由研究学習はこの多様性を保障することで、結果的により多くの子どもが教科の本質へと肉薄するのを支えてきたのです。

資料2 本物の道具でお茶のお点前を体験的に学ぶ



自分の興味・関心を追究した結果、教科学習への理解も深まっています。



資料3 タブレットを活用して作曲に挑戦



資料4 バイクの仕組みを納得がいくまで研究

